
記憶喪失の求職者

ただ書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶喪失の求職者

【Nコード】

N5162Y

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

三浦みさきには記憶がなく、その名前も仮のものだった。

彼女は自立した生活を送るために仕事を探していたが、身の上のわからない彼女にはなかなか仕事が見つかることはない。

しかしある日、毎週彼女の話聞いていた医者に、彼女は突如記憶を思い出したと伝える。

その記憶とは……。

「たんとんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品

です

「先生、わたし思い出しました。警察官だったような気がします」
みさきは固いソファに座ると、すぐに話を始めた。

「ほう、警察官。どうしてそう思いましたか」みさきに答えながら
医者もゆつくりとした動きで、彼女の向かいに腰をかけた。

「ええ、初めてこの病院に来た時から家を見つけて現在の生活になるまで、今でもずっとお世話になっている方がいまして、その方が他人ではないように思うのです。先生もご存知だと思いますが、女性警察官のHさんです。でも、Hさんが家族や友人、わたしの知り合いでしたら、すぐに気づかれるはずでしょう。気づかないということは、Hさんはわたしを知らないことになります。それなのに他人とは思えない。ということは、同じ仕事をしていた可能性が高いと思うのですが、いかがでしょうか」

「すると、思い出したと言うよりも、そう思ったということでしょうか」

「ええ、でも間違いないと思います」

「なるほど……。ああ、コーヒーでも飲みますか」

医者ともさきが座っている応接セットの奥にある事務机の前で椅子に座ってふたりを見ていた女性看護師は、医者の言葉を聞くとすぐに立ち上がって部屋の隅にあるコーヒーマーカーに向かった。

医者は首をひねって彼女の後ろ姿に軽く礼を言うと、またみさきを正面から見据えた。

「行方不明の警察官がいたらすぐに搜索されて情報が入ってくると
思います……。どうして間違いないと思うのですか」

「ええ、わたしはかなり体力があるようなのです。警察官でなければ自衛官かもしれません」

「うん、どうだろうね。とりあえず警察にはわたしから問い合わせ
てみましょうか。他に思い出したことなどはありませんか」

「いいえ、特には……」

「では、最近のお話を聞きましょうか」

三浦みさきはいわゆる記憶喪失で、三浦市にあるこの病院に入院していた。現在は退院して週に一回ほどの頻度で通院をしている。

発見時の彼女は突如交番に現れ、記憶がないのだがどうしたらいいだろうかと勤務中の警察官に尋ねたのだった。

彼女は財布も身元のわかるものも身につけておらず、グレーのパーカーにベージュの七分丈のズボン、とても外出用とは思えないサンダルを履いていた。

交番勤務の警察官は最初何かの冗談かとあしらっていた。記憶を失ったというのならば、何らかの事件や事故に遭ったと考えられるが、彼女には怪我もなく衣服も乱れていなかった。あまりに突飛な話であるし、警察官の対応もしかたのないことだろう。

しかし、警察官が何を言っても帰ることがなく、彼女は繰り返し記憶がないことを訴え続け、やはり何かおかしい、手に負えないと考えた警察官が応援を呼び、その後病院に連れてこられたのだった。

年齢は十代後半から二十代半ばに見えた。化粧はしておらず、ラフな服装からも近所の人間ではないかと思われたが、該当する行方不明者の情報はなく、彼女の入院中も続けられていた周辺での聞き込み調査でも身元は判明しなかった。全国に調査の幅を広げてもそれは同じことで、現在に至るまで何ひとつ彼女の身元に関する情報は出てきていない。

言葉は失っておらず、その他の生活に関する知識は何も失っていないかった。病院の駐車場で試したが、自動車の運転もできるようだった。もちろん交通ルールも知っていた。言葉遣いや普段の振る舞いからも、成人した女性、恐らくはどこかで就労していた女性である可能性が高い。しかし、これまでのところ何かに対して突出した知識や能力は見つかっておらず、自分では体力があると言うが若い女性の中では平均程度だ。専門的な知識や技術が必要のない仕事をし

ていたのではないか。医者はこう考えていた。

しかし、その仕事を含め、学歴、家族、交友関係、名前、年齢、そういった事柄についての記憶は、すべてを失っていた。

もちろん、三浦みさきという名前も仮のものだ。三浦市で発見された女性ということで、入院中に看護師たちが「三浦の女性」と言っていたものがいつの間にか「三浦さん」になり、それが本人の耳にも入って自分の名前を「三浦みさき」とした。「みさき」は“それっぽいから”と彼女自身が決めたものだった。

一応年齢は二十二歳としてある。これもみさきが自分で決めたもので、彼女が言うには「大人として見られる一番若い年齢」だった。二十二歳の三浦みさきは、公的機関や彼女のような身の上の人間を支援するNPO団体からの支援もあって、現在は市内のアパートにひとりで暮らしている。世の中にはいろいろな団体があるものだと医者は関心していた。仕事を探してはいるが、職歴も学歴も、身の上すらもわからない若い女を雇ってくれる会社などなかなか見つからない。同情はしてくれるのだが採用されることはなく、現在のみさきの悩みはここにあった。

もう少しいろいろと不安になるものではないかと医者は思っていたが、家族や友人の記憶がなければ気にもならないのかもしれない。みさきはあまり過去を気にしてはおらず、人の世話にならないで早く自立した生活ができるようにならなければと、現在の状況に焦燥していた。

「先生、わたしはスポーツ選手だったかもしれませんが」

みさきが来院するたびにこのような話をするのも、何かを見つけないければならない、自分がいるべき場所を作って自分の生活をしなければならぬ、そういった気持が強いのだらう。彼女の自我も肉体も確かに存在しているが、社会的にはいるのかいないのかわからない存在で、その不安定な自分をどこかに押し込めたい欲求があるものと思われた。

医者にとつては専門外のことではあるが、筋肉の付き方などからも彼女はスポーツ選手でなかっただろうと容易に判別できた。しかし彼女の話は否定せずに、現在の状況や思考を十分に聞き出す。みさきの発見時の状況から、記憶喪失の原因は外的な衝撃によるものではなく、精神面に強い衝撃があったからなのではないかと思われた。治療については医者もお手上げの状態で、何かの偶然で記憶を取り戻すこと以外ないかもしれないと半ば諦めていたが、せめて彼女の精神面の助けになれるようにと医者は考えていた。もちろん、このような特異なケースに興味も強かった。

みさきがこれまでに“思い出した”職種は、警察官とスポーツ選手の他に、医師、看護師、理容師、調理師、バスドライバー、写真家、画家などがあつたが、いずれも身近で見かけたものを自分に結びつけただけのもので、それらに関わる知識や技術は持っていなかった。すべて自分が当てはまるのではないかというみさきの思いつきで、その思いつきから希望や期待を含めて本来の自分を想像し、そこに居場所を求めようとしているのだろう。みさき自身これらの職種にこだわりのあるわけではなく、様々な職種に応募していた。

みさきは愛嬌のある容姿をしているし、礼儀正しく一般的な成人程度の教養もある。身の上がわからないことは問題かもしれないが、それでも商店のアルバイトや小さな会社の事務員などとして、すぐに仕事が見つかるだろうと医者は考えていた。しかし、医者のお思つたようには仕事が見つからず、みさきは強く焦りを感じていた。

「先生、どうやらわたしは忍者だつたようです」

「ほう、忍者ですか。どうしてそう思つたのでしょうか」

みさきの言葉に医者は少し驚いた。これまでは現実にある職種しか出てこなかったが、今日は忍者だと言う。忍者が現実にはいないとは言いつてもいいが、現代のこの国に忍者というものがあるのだろうか。医者は、忍術道場などは聞いたことがあつたし、有名な忍者の何代目だと称する人物をテレビで見たこともある。しかし、歴史やフィ

クシヨンの中に見られるあの忍者が現代にいるとは思っていなかった。

「思い出したのです」

「何かきっかけがあつて思い出したのですか」

「いいえ、百日経ったら思い出すようにしていました。三日前でちょうど百日になりましたので」

「思い出すようにしていたということは、自分の力でそうしたというのですか」

「はい、詳しい方法は説明できませんが、そのための術と薬があります」

「その、忍者だったということ以外にも思い出されたことはありますか」

「すべて思い出しました」

「お名前やご家族もですか」

「家族はいません。名前はわかりますが教えることはできませんし、今は不要です」

「住んでいたところはどこでしょう」

「わかりますが、それも教えることはできません」

確かにみさきは少し突飛な話をする事があつた。しかし今回は違つてゐる。名前も住まいもわかるとはつきり言つたことなどなかった。

とは言ふものの、それらを教えてくれることはないので、医者は少し戸惑いながらも、テレビが何かの影響による思いつきだろうと考えた。

「なるほど……。少しコーヒーでも飲みましょう」

医者言葉に、奥に座つていた看護師はいつものようにコーヒーの準備に向かつて、医者はその後ろ姿に軽く礼を述べた。

「すみません、先生。おかしな話をしていると思われるでしょうでも、これは本当のことです」

「わかりました。では、どうして名前や住まいを教えてくださいな

とができないのでしょうか」

「忍者なので、としか言いようがありません。今は忍者ではありませんが……」

「ふむ、しかし住まいがわかっていいるのなら、戻って再び忍者として生活ができますね」

「いいえ、それができないのです」

「なぜですか」

「わたしは忍者を辞めたのです。他の道で生きることにしたのです」

「でも家には戻ってもいいのでは」

「いいえ、そこにはもう何もありません」

「どういうことでしょうか」

医者が尋ねると、みさきは少し間を置いて、何かを考えるようにして窓の外を見た。そしてテーブルに置かれたコーヒーをひと口飲むと、「守秘義務というものがありますよね。あまり他の人に話さないでいただきたいのですが……」と話を始めた。

みさきが言うには、忍者を辞めるためには一度記憶を消さなければならぬらしい。それが百日間というのが決まりだった。その間に他の忍者たちは、それまでの拠点を捨ててどこか別の場所に移動してしまうという。みさきは忍者としての自分、過去を捨てて、新しい自分として生きていくことを決め、自ら記憶を操作したらしい。

「なので、わたしは今まで通り仕事を探さなければならぬし、今まで通り三浦みさきでなければならぬのです」

「記憶はあってもなくても変わらないということですか」

「はい、むしろ思い出さないままの方がよかったです、あまり長く記憶を失くしたままにしていると、脳に影響が出てしまうらしいので」

医者もつい興味を持ってしまって、忍者についていろいろと尋ねたが、みさきからは何も聞き出すことができなかった。

その後はいつものように近況を聞き、みさきは礼を言って帰った。

その日以降、みさきは少し変わった。

警察官だったかもしれない、看護師だったかもしれない、といった話をしなくなり、医者への気のせいかもしれないが口数が減ったようだった。

みさきは本当に忍者だったのかもしれない。当初は信じていなかったが、どうしてか時間が経つほどに医者はその話を信じるようになっていった。

しかし、みさき自身が過去を必要としていないこともあり、医者は以前までと同様にみさきに接していた。

それから少し経って、みさきは小さなデザイン会社の事務員としての採用が決まり、医者はそれを機にもう通院の必要も無しとした。

「やはり忍者だったことは思い出してよかったかもしれません。人前で自分を演じられるとも言いますか……」最後の診療日にみさきは医者にこう言った。「中に自分がひとりいるからこそ、新しい自分を作るのですね。これがわかれば人が変わるのとは意外と簡単かもしれません」

「なるほど。確かにその通りかもしれませんが」

医者が答えた後に少し間を置くと、奥に座っていた看護師は医者の方を向いて前にコーヒースタンドを準備するために立ち上がった。

「コーヒースタンドは飲みますよね。慣れてくるとすごいですね」と医者はコーヒースタンドを準備している看護師を見やった。

「わたしにも先生がコーヒースタンドでもとおっしゃるだろうことがわかりましたよ」とみさきは笑って言葉を続けた。「わたしも職場でそうやって慣れることができるでしょうか」

「環境によって慣れるまでの長さは違うでしょうが、慣れることは難しくないと思いますよ。もし慣れることができなかったら、また別の仕事を探してもいいでしょう」

「やっと思つた仕事ですし、そんな簡単には別の仕事も見つかりませんよ」

「もしもです。その時にはまた相談に来てください」
「なるべくそうならないように頑張ります」

みさきはその後、病院に来ることも医者に連絡をしてくることもなく、医者も時折彼女を思い出すことがある程度だった。

数年経っても、医者は変わらない場所で変わらない診療を続けており、応接セットのソファ―に患者を座らせていた。

いつものように患者との話の途中で医者が少し間を置くと、奥の事務机の前で控えていた看護師が立ち上がってコーヒ―の準備に向かう。

今週ここに来たばかりの看護師だ。ずいぶん気が利いてるなと医者は関心して、なんとなく見覚えのある後ろ姿に礼を言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5162y/>

記憶喪失の求職者

2011年11月17日21時16分発行